The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鈴木朖の孟子論
Author(s)	鵜飼, 尚代
Citation	中国研究集刊. 1996, 18, p. 18-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61039
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

鈴木朖の孟子論

鵜飼尚代
（愛知女子短期大学）

一　はじめに

鈴木朖（一七六四～一八三七）は本居宣長門下いわゆる鈴門下の国語学者として数々の業績を残したばかりか、天保四年（一八三三）からは尾張藩の藩校明倫堂に新たに設置された国学の講義を担当している。しかし、儒者としての評価も高く、明倫堂督学も勤めた細野要斎（一八二〇～九七）は、その著『尾張名家誌初篇』儒林の部に朖の伝記を残している。その中で、朖は文に巧みで〈長ずるに及び愈精練を加え、清人銭泳其の文を見て称して曰く、先秦両漢の風有り、唐宋八家の習無し、と〉といった評価を得たこと、世の風潮を疾み、厳しい子弟教育を行なったことなどを述べている。経歴には、晩年〈年七十に向かい明倫堂教授（注1）に擢きんでられ、始めて日本書紀を校中に講ず〉と、国学枠で講義をもったことを明記しながら、業績では『学訓』『論語参解』『大学参解』『六経諸子説』など漢学に関する著作が列挙され、活語を中心とした国語学的業績には触れられていない。要斎が、朖が鈴門下にあったことを知らぬはずはないが、それを舎いても儒者として高い評価を得たということであろう。

さて朖には『孟子』を直接にあるいは間接に論じた著作がある。『孟子』は四書の一でありながら、その革命説のために日本ではあまり歓迎されなかった書物である。確かに朖が『孟子』理解のために参考にした学者たち、日本人としては伊藤仁斎・荻生徂徠・冢田大峯ら、孟軻という人物について語る太宰春台などを

みるに、仁斎以外は『孟子』ないし孟軻に対して批判的といえる。

仁斎は「孟子古義総論」で『孟子』を孔子の言の解説書（解釈書）と位置づけ、重要なのは〈仁義〉〈王道〉であり、性善説を奥旨と捉えるのは誤りとする。太宰春台は「孟子論」で、孟子がいかに孔子と異なった主張をしているか、また混乱の世を治める策としてはあまりに迂遠であったため、自ら〈戦国の士〉にとどまっているばかりか、後世の学者の在り方さえ誤らせていると、孟子批判を展開する。冢田大峯は、何等それらしい業績を残していない孟子を道統に組みこむことはおかしいとする。因みに本居宣長は『葛花』で、孟子を〈王道をいひたてにして、ゆくさきざきにて謀反をすすめあるきしは、これ又湯武同前の大悪人〉と、はなはだ孟子をきらう。

こうした状況の中にあって、朖が『孟子』や孟軻をどのように捉えていたかは、朖自身の思想を語る上でも、また日本における『孟子』受容の流れを見る上でも興味深い問題である。しかもこの問題は、前に拙稿「鈴木朖『孟子説』成立考」（注2）において残した課題でもあった。本稿では人物論と著作論とに分けて、鈴木朖の孟子論を考察していきたい。

二　人としての孟子

朖は「論孟子三則」（『離屋集初篇』所収）において『孟子』ではなく孟子、すなわち孟軻という人物について論じている。

この論文の成立時期は明記されていないが、論中明らかに太宰春台とおもわれる人物を〈大抵世の物氏を学び経済を志す者〉といっている点が、徂徠学派に対して微妙な位置にあることを示しており、朖が鈴門に入門した寛政四年（一七九二）ごろ成立したのではないかとおもわれる。

さて内容であるが、孟軻が譏弾されるのは

①其の言抗直に過ぎ、蘊籍無し。

②迂遠にして事情に闇し。

という孟軻自身の欠点のために、斉や梁といった大国で採用されなかった点にある。

それに対し朖の反論として

・『論語』顔淵篇にみられるように孔子にも〈抗直剴切〉な側面がある。
・斉の宣公・梁の恵公が暗愚なため、孟子を理解できなかった。

といい、孟軻の物言いの〈抗直〉さを短所とせず、大国で採用されなかったのは採用する側に問題があったからだと孟軻を擁護する。

さらに孟軻を譏弾する人が

③孟子の滕国に用いらるるに、拙謀無才。

いったん採用されても孟軻は有効な策がうち出せなかったと攻撃した。

これに対し朕は、孟軻が滕で提案したことは、韓非や呉起の策略によく似ているが、孟軻を重用した滕が小国で天下に覇たる実力がなかったために、孟軻の策が評価されないのだという。③と同時に②に対しても反論している。

以上が「論孟子三則」の骨子で、朕が孟軻という人物を徹底して擁護していることが分る。

さてこの間に唐突な形で徂徠学批判が展開される。③に触れた直後に

大抵世の物氏を学び、経済を志す者、率ね多く智術を崇び、徳義を外にし、孟子を刺り、宋儒を罵る。是れ豈唯だ孟子を刺り、宋儒を罵るのみならんや。其の経伝載する所、堯舜以下聖賢の格言懿範に於いて、率ね厭棄荒廃して、悦ばず省みず、遂に轍を分けて以て背馳して自らは知らざるなり。特り敢えて昌言して之れを排せざるのみ。

という。明らかに太宰春台批判とおもわれるが、その〈智術〉にはしり〈徳義〉をないがしろにして、孟子批判を行ない（注3）宋儒を罵倒する姿勢が、結果的に〈堯舜以下聖賢の格言懿範〉の教訓的価値を剥ぎ取っていることに気付いていないことを批判する。

是れ末流の弊と曰うと雖も、物翁亦其の責を逃るる能わざる者有り。翁　宋儒の失を矯し、言を立つるに少や偏り、遂に此の弊を致す。

こうした弊害は、もとを正せば、やや偏狭な立場で宋儒の欠点を質そうとした徂徠の学問姿勢から出てきたのであり、その点で徂徠は責任を追求されるべきだとする。

今世の庸儒、物氏の余沢に霑い、其の徒の唾余を

掇る者、其の宋儒を疾視すること、猶邪教の師のごとく、朱子輩を軽蔑すること、猶小児のごとし。意を肆にして詆排して、自ら其の古訓に背くを覚えざるなり。夫れ古訓を舎きて式らずして、其の意尚に任す者、未だ大いに悖らざる者有らざるなり。

いまや徂徠学の徒は目の敵のように宋儒をきらい、こどものように朱子を軽蔑しているが、その態度が〈古訓〉からはずれていることに気付きもしないとする。

この徂徠学批判は「論孟子三則」のほぼ五分の一を占めるが、その要点をまとめると、

・智術が先行し、徳義が見失われている

・無反省に朱熹をはじめとする宋儒を軽蔑することは、学派本来の〈古訓〉を重視する立場から大きくはずれている。

との二点に集約できよう。

「論孟子三則」は人としての孟軻の擁護論で、論中夫れ梁恵斉宣魯哀衛霊の属の如き、亦猶是くのごときのみ。仲尼孟軻を百にすと雖も、奈何ともする能わざる者なり。

とあるように、孟子を孔子と並称するほど、朋は孟子を高く評価している。しかし、それは烈しい徂徠学批判、特に太宰春台をはじめとする経世派批判を背景にしているのである。

三　著作としての『孟子』

鈴木朋の『孟子』関連の著作のうち、鈴門入門以前に執筆されたとおもわれるものに「読孟子注疏」（以後「読注疏」と略記する）がある。「読注疏」は寛政十一年（一七九九）に闕名氏が『離屋読書説』を謄写した『離屋読書説不分巻』に収められている。書誌的検討及び内容の一端については前引の拙稿「鈴木朋『孟子説』成立考」において触れているので、そこで得られた結果をまとめると、

成立時期：天明二年（一七八二）以前。

内容：後漢の趙岐と宋の朱熹の解釈を比較検討し、結論として朱熹の解釈の方が優れているとする。

ということになり、「読注疏」は若い朕が新注と古注を比較しながら記した読書記録といえる。後年『孟子』を読みなおして記されたのが『孟子説』であり、戦禍にあった自筆の『離屋読書説』中の「読孟子」は、「読注疏」ではなく、この『孟子説』と考えられる。『孟子説』についても前引拙稿において書誌及び内容の一端の検討を行なっているので、そこでの結論をまとめると

成立時期：寛政十一年以降。

内容：趙岐と朱熹の解釈に対する関心は希薄になり、伊藤仁斎・荻生徂徠・太宰春台・冢田大峯など日本の儒者の解釈に対する関心が相対的に高まっている。

ということになり、朕が先行する江戸期の儒者の解釈に力点を移し『孟子』を読みなおしたことがわかる。

さて「読注疏」の序論部分はほぼ『孟子説』総論に収められているので、『孟子説』総論で朕が述べているところをまとめると

(a)孟軻は子思の門人である。

(b)『孟子』は門人が執筆したもの。

(c)『孟子』の読み方について。

(d)趙注より朱注の方が優れている。

となる。

(a)については、仁斎でさえ孟軻は子思の門人ではないとし（注4）、大峯などは『史記』の記事の矛盾から孟軻が子思の門人ではないことを長々と証明している（注5）。しかし朕は至って手短に

荀卿十二子を非るに、子思孟子と連言し、及び書中曾子子思の言行を称すること多し。離婁篇身を誠にするを論ずると中庸と同文なるを以て、皆證するに足るなり。

と、使い古された資料を根拠に、あくまで孟軻は孔子の教えの正統な後継者と位置づける。

(b)については

其の体裁を観るに、論語に擬效す。蓋し弟子為る所にして、其の師を尊び、諸を孔子に比す。孟子と曰うは、以て孔子と別つなり。

〈子〉という男子の尊称が使われていることから導きだされた結論で、この根拠も目新しいものではない。弟子が執筆したにしては文章が〈高妙精微〉だという

疑問に対しては

或いは陰かに指点して之れを裁定す。

とまでいい、あくまで『孟子』は弟子が編纂したとする。

(c)は『孟子』の読み方あるいは学問一般のあり方であり、

伊藤仁斎先生孟子古義を作りて曰く、古人の学は経世を以て務めと為して、修身以て之れが本と為し、明道以て之れが先と為す。皆夫の経世に帰する所以なり。故に孟子の書を釈する者、当に前三篇に於いて其の帰趣を観て、後四篇に於いて其の本づく所を知るべきなり、と。

という仁斎の見解を唐突に引用するのは、朕の捉え方をその後に述べるためではなく

此れ物徂徠の常言、以て宋儒に殊異する者、仁斎既に之れに先んず。

徂徠が宋学批判として常に言っていることが、実は仁斎の見解であることをいうためであった。

(d)については、「読注疏」での成果と考えてよかろう。

以上『孟子説』総論から、朕が孟子を道統のなかに位置づけ、孟子は孔子に比肩し得ると捉えていたこと、『孟子』の書は孟子の弟子が編纂したとすることなどが知れる。

さて、各章の解釈から朕の思想を伺い知るような点をピックアップし有機的に組み立てるのは、記事の分量の少なさからたいへん難しい。気付いた点としては離婁下の十九章について、

人の禽獣に異なる所以は幾んど希なり。孟子性善を言うに於いて、常に幾んど希なりと云えば、性善は恃む可きに非ず。唯養いて以て徳を成す可きを見る可きのみ。

と、短い見解を記すのみ。性が善であるとするのは(性善そのものに対する見解は『孟子説』にはない)、簡単にはいかないにしろ、修養すれば徳を成就させることができるということだとする。

また尽心上の三十八章について

形色は天性なり、云云。断云わく、…(中略)…朕云わく、徳も亦天性なり。但し徳は必ず須く修めて之れを養うべし。然らずんば徳成らずして、

形を配するに足らざるなり、と。

と記している。章の意味として大峯の『孟子断』の見解を引用し、朖は修養論としての意味を強調している。

総論の(c)に関連させてみるならば、朖には『孟子』を修養の書として読もうとする傾向があったのではなかろうか。

四　革命説について

「読注疏」『孟子説』では革命について全く触れられていなかったが、本居宣長が孟子を革命を説く不遜の士として毛嫌いしていることからも、革命を『孟子』の特色の一とする見解が朖になかったはずはない。ここでは朖の革命観について検討したい。

『離屋集初篇』に「伯夷論」という論文がある。論文末尾の記事により、「伯夷論」が「老子説」の後に執筆されたことは確認できるが、両者とも成立時期は未詳である。ただし高橋広道がまとめた『離屋先生文抄』によれば、広道が筆写し終えたのは文政十年（一八二七）晩春であるので、遅くともこの時、すなわち朖六十四歳までに執筆されている。

内容は、同じく「伯夷論」末尾に、

前人伯夷伝に弁ずる所の者を観、因りて伯夷の行事を考え、具さに其の語を論じ、尽く附会浮言を刪去して、実なる者見る。

と自ら述べているように、『史記』伯夷列伝の伯夷・叔斉の経歴に関する記事を、『論語』『孟子』『荘子』『呂氏春秋』に基づいて再検討を加えたものである。

論の冒頭、朖は『孟子』公孫丑上・尽心下の語により〈隠君子〉伯夷・叔斉が時宜をみて世に出たり或いは隠れたりする態度を高く評価し、〈百世の師〉たる〈賢人〉（『孟子』尽心下では〈聖人〉）だとする（注6）。

さて、そうした高い見識をもった伯夷であるから

武王末に命を受け、紂を誅して兆民を安んずるは、聖人の弘なり。伯夷にして在せば、必ず将た之れを輔けん。若し乃ち非りて之れを怨み、餓死するに至らば、是れ命を知らず、民を恤まざるなり。

何ぞ仁と謂わんや。

天の〈命〉を受け人々の生活を安定させるために断行する紂王の誅伐であれば、伯夷が居合わせたならば必ずや協力したであろう（協力していないということは、伯夷がそこに居合わせていなかった証拠となる）、というのである。

朕は湯武放伐を肯定する。孟子が紂王を〈一夫〉におとしめ、紂王と武王との君臣関係を断ち切ったうえで武王による討伐を肯定したのとは異なる論理、すなわち〈命〉であること、〈兆民を安んずる〉ためであること、この二点を根拠に革命が正当化されている。その場に居あわせ、革命の強行に反対することは、〈命〉を知らぬ、そして〈民を恤ま〉ない行為だと否定されるのである。

因みに朕の抱く思想の中で〈命〉の意味は極めて重い。個々の人を支配するものでありながら、人の理解を超える〈天〉（朕の場合〈神〉といってもよい）から降される使命、つまり人としては抗いがたい運命ということである（注7）。

確かに「伯夷論」の中で、武王は善政を敷いた文王の後継者であること、かの太公望でさえ武王に加担していることを理由に、名君中の名君とされ、武王討伐の強行を、武王に例外的に賦与された〈命〉とする観もある（注8）。しかし朕のいう〈命〉は人の合理的理解を超えるので、限定的に武王にのみ賦与されたと枠をはめると矛盾が起こる。ここは一般論として革命が肯定されているとみてよいであろう。

朕が生きたのは江戸後期、幕末も近い。朕の子弟の世代になると、尾張藩も佐幕か倒幕かで揺れ動くこととなる。朕にどれほどの時代意識があったかは不明であるが、条件（〈命〉であること、人々の生活を安定させる目的であること）が備われば、革命を可とする見解の意味は大きかったといえよう。

五　おわりに

鈴木朕の孟子論を考察する場合、人物論と著作論とは別に考えなければならない。朕は人としての孟軻を孔子の教えを正統に継承する、すなわち道統のなかに位置づけるが、この説は孟軻ないし『孟子』批判に対

する擁護論の形で提出されている。江戸期において『孟子』は微妙な立場にある書物で、孟軻や『孟子』に対する批判も特定の学派によってのみ行なわれたのではないが、朖が反駁しようとしたのは、徂徠学派、特に太宰春台に代表される経世派による批判であったとおもわれる。

朖は徂徠学派から国学鈴門に移った人物である。朖がなぜ鈴門を叩いたかについては、憶測があるのみで定説はまだない。ただ『孟子』擁護論の中で吐露されているように、智術を先行させ徳義を蔑ろにする徂徠学派の一部の徒の姿勢には憤りを感じていたらしい。鈴門に入った後も徳義を追求した朖であってみれば、不満であったとおもわれる。あるいはその不満が鈴門に入る後押しをした可能性もあろう。

さて著作としての『孟子』について、朖は『論語』同様『孟子』は弟子が編纂したものとする。また『孟子説』の断片的な記事からではあるが、朖が『孟子』を修養の書として読もうとする傾向も伺える。

問題の革命説については、朖はそれを運命とし、また民のためだとして是認する。賢者ならば積極的に加担するとまでいう。朖にあっては革命を是認するための細工など必要ではなかった。

このように朖は孟軻も『孟子』も高く評価するのだが、晩年にまとめられた『離屋学訓』では『孟子』を『論語』と同列に位置づけてはいない。幕末を背景としつつ、孟子の革命論を是認しながら、やはり朖にあっても『孟子』は微妙な書物であったようだ。

注

1　「徳川家記録」により朖は〈明倫堂教授〉ではなく〈明倫堂教授並〉であったとされる。（鈴木朖顕彰会編『鈴木朖』・一九六七年・鈴木朖顕彰会）

2　『愛知女子短期大学研究紀要』第二十九号人文編・一九九六年

3　太宰春台の「孟子論」（『斥非』の付録）では、孟子が孔子と異なる点として、主君が暗君であれば臣下も暗愚になるとすること、管仲をあまり評価しないこと、性善説を力説すること、伯夷を聖人ともちあげていること、統治方法を王道と覇道

との二つに分けていることなどがあげられ、さらに孟子批判として策が迂遠であること、そのために採用されず力をもち得なかったこと、時代錯誤であることなどが述べられている。

4 『孟子古義』総論

5 『孟子断』総論

6 伯夷を高く評価しながら、伯夷を〈聖人〉から〈賢人〉へ位置付けをかえている。太宰春台は「孟子論」上で〈夫れ軻既に仲尼に違いて伯夷を聖人と謂う〉のは〈亦妄ならずや〉と批判している。

7 朖の「天道論」（『離屋集初篇』所収）に詳しい。拙稿「鈴木朖「天道論」をめぐって」（『文莫』二十号・一九九六年・鈴木朖学会）参照。

8 太宰春台は「孟子論」上の中で、〈彼れ（賢人君子―鵜飼注）其の之れを為すや、常道もて行なう可くんば即ち之れを行ない、其の或いは不可ならば、即ち時を視て権を行なう。湯の桀を放じ武王の紂を討ち、周公の二叔を誅するが若きに至りては、皆聖人の事なれば、後世譏り無し〉といって、湯武放伐を特殊事例としている。